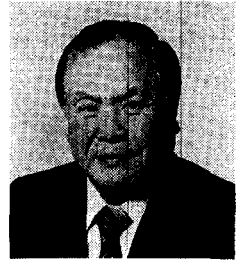


## 東京一極集中と地域の発展

大分県知事 平松守彦



### 「東京不満、地方不安」の時代

今日における内政上の課題は、東京プロブレム、つまり人、モノ、情報の東京一極集中に伴うさまざまな問題をどのように解決するかである。東京一極集中の流れは依然として止まらない。その結果、東京に住む人が知らないうちに1坪の土地が1億円を超え、相続税も払えない状況である。普通のサラリーマンが一戸建ての家を買おうとしても、都内では到底手が届くところにはない。自宅とオフィスの距離はますます遠くなり、満員電車で揺られながらの、通勤ならぬ「痛勤」が常態化している。一方、地方では緑豊かな山野は残っても、若者が流出して過疎化に拍車がかかり、先行きの不安が一層高まっている。経済大国となり、日本全体でみれば非常に好景気で順調のように見えるが、一皮むいてみると、東京に住む人にとっても地方に住む人にとっても豊かさを実感できる状況ではない。今や、「東京不満、地方不安」の時代であり、これを「東京満足、地方安心」に流れを変えることが、21世紀に向けての最大の政治課題である。

### 九州府構想と地域連合

この意味において、竹下元総理が提唱したふるさと創生は国づくりの大切なコンセプトである。地方が活性化しないと、真の民主主義は成立しない。米国、西ドイツのように欧米先進国の多くが分権型であるのに対して、日本は首都だけが突出した発展途上国型の都市構造である。この構造は遷都論や一省庁一機関の移転では解決できない。それではどうすればよいか。

要は、明治政府以来の中央集権体制を改め、東京に行かなくても、事が済むような仕組みをつく

ることである。今日のような陳情政治をやめ、地方分権を徹底することが必要である。地方にいきなり権限を移すのが難しいのであれば、地方ブロックごとに国の権限を集めた地方府をつくる。九州であれば九州府をつくり、九州のことはそこですべて解決できるようにする。そのうえで、地方に徐々に権限を移していけばよい。他方、地方の側も各県がばらばらでは巨大な磁石である東京には対抗できないので、西瀬戸経済圏構想のように地域と地域が連合して広域的な経済圏をつくる。さらに、新たな国土の発展軸として、九州と四国を豊予海峡トンネルで結び、四国を縦断して近畿、関東につながる第二国土軸構想を推進することである。

### 地域に何を蓄積するか

東京に人、モノ、情報が集中していることの根源は、文化や経済など、あらゆる価値が東京に集まっていることにある。重要なことは、東京から何を移転するかではなく、地方に何を蓄積するかという地方からの発想である。

かつて、江戸時代には、各地域に藩校があり、全国の秀駿が地方に集まっていた。明治維新後も、戸畑には工業、米沢には織物、諏訪には蚕糸の専門校と、それぞれの地域の特性に応じた専門校が地方にあり、価値が全国に分散していた。また夏目漱石は熊本(旧制五校)、「荒城の月」の作詞者である土井晩翠は仙台(旧制二校)というように、各地の学校には名物教授がおり、独自の学派や文壇が地方に育っていた。しかし今日は、学者も東京に集まり、すべての価値が東京に集中している。

したがって、いま一度、原点に戻って、住民の創意工夫のもとに、地域の特性を生かして地方にしかない価値や文化を蓄積していくことが必要である。地域を離れては文化はない。地域にしかない文化、すなわち「しかない文化」というものをそれぞれの地域でつくるべきであると考えている。私が提唱した一村一品運動は地域に埋もれている価値を掘り起こし、それに磨きをかけて、ローカルでありながら、グローバルに通用するものをつくる運動である。大分県の代表的な一村一品は椎茸であるが、このようなモノづくりだけでなく、世界に通用する地域独自の技術や文化といったソフトの価値をつくりだすのも一村一品運動である。

## R&Rの地域づくり

最近、地域の活性化に向けて各地でリゾート開発や博覧会が行なわれているが、日本国中、金太郎アメのようなリゾート列島や博覧会列島では困る。単なるリゾートや博覧会ではなく、R（リサーチ）とR（レクリエーション）を結びつけた地域づくりが大切である。

たとえば、本県の南部、リアス式海岸が美しい蒲江町では、豊後水道に育つ魚の生態や古い漁法、漁村の生活を学習しながら、スポーツやレクリエーションを楽しむことのできるようなマリナルチャーセンターを建設する。県央では、「平成森林公園」をつくり、香りのある木や草花を植えて、香りの文化に接しながら森林レクリエーション活動ができるようにする。また、大分空港に近い日出町では、都市公園の一村一品クラフト公園の中に、家族みんなで竹文化に触れながら遊ぶことのできる施設（ハーモニーランド）をつくる。このように、本県ではR&Rの発想のもとに遊びながら地域の文化に触れ、新しい知識を得ることのできるような新しい地域づくりを進めている。

## ソフトウェア研究開発機能の集積

九州は世界的なIC生産の基地である。テクノ

ポリス構想の推進によって大分空港周辺にもIC工場が立地しているが、これだけではIC植民地であり、地域の発展にはつながらない。

これからはソフトウェアの時代。ソフトウェア技術をあらゆる地域産業に導入して産業の高度化を図り、頭脳立県、技術立県をめざすことが必要である。このため、ソフトウェア技術の地域産業への移転を図る拠点としてソフトウェア産業等を集積したソフトパークを大分市内につくっている。さらに、現在東京の大手ソフトウェア会社が、大分空港に近い杵築市の海岸部でソフト研究開発拠点となるソフトプロバンス（ソフト村）の建設を進めている。海を望む豊かな自然環境があり、隣接してマリーナやゴルフ場が建設される。地価が安いので、従業員の住宅の取得も容易である。ゆとりのある恵まれた環境のもとで、レクリエーションを楽しみながらソフトウェアの研究開発を行なうのが、ソフトプロバンスの計画である。

## シルバーサンシティ構想

大分県は気候が温暖であり、全国有数の温泉もある。物価も全国一安い。こうした恵まれた環境を生かせば、通産省のシルバーコロンビアのように高齢者の方々を海外に移住させる構想は要らない。第一線を退いた企業人や文化人に大分に移住していただき、頭脳村、文化村を建設する「シルバーサンシティ構想」を進め、こうした方々の能力を地域の文化の創造や産業の高度化に活かしていきたいと考えている。

人の顔が異なるように、各地域は自然や伝統、文化、風土などそれぞれ違った顔をもっている。このような特性を最大限に生かし、東京にはない「しかない文化」を創造することがこれからの地域づくりにおいて重要である。生き生きとした顔の地域をつくるため、オペレーションズ・リサーチによって、地域の特性を生かした最適地域づくりの戦略を研究してみてもどうだろうか。